

## 2016年の福井県におけるブナ科樹木3種の着果状況

國永知裕<sup>\*1</sup>・加藤幸洋<sup>1</sup>・松村俊幸<sup>1</sup>

**要旨:** 秋期のツキノワグマ大量出没予測の基礎資料とするため、2016年夏、県内39地点においてブナ科樹種3種(ブナ、ミズナラ、コナラ)の着果状況を調査した。福井県全体の2016年の作柄は、ブナは凶作、ミズナラは並作、コナラは不作であった。しかしながらブナとミズナラの作柄は、過去の大量出没年(2006, 2011, 2014年)に比べて良好であった。このことから高標高域では一定量の餌資源があると推測され、このことが2016年はクマの人里への大量出没が発生しなかったと考えられる。

**キーワード:** 豊凶, ブナ, ミズナラ, コナラ, ツキノワグマ

**Tomohiro KUNINAGA<sup>\*</sup>, Yukihiro Kato<sup>1</sup> Toshiyuki MATSUMURA<sup>1</sup> 2017. Acorn crops of 3 Fagaceae species in Fukui prefecture in 2016. Ciconia (Bulletin of Fukui Nature Conservation Center) 21:29-38.**

We conducted a survey to estimate the acorn crop yields of three Fagaceae species (*Fagus crenata*, *Quercus crispula*, and *Q. serrata*) in 39 stands in Fukui Prefecture in summer 2016, to predict the occurrence of mass intrusions of the Asiatic black bear *Ursus thibetanus* into residential areas. The acorn crop yields of *F. crenata*, *Q. crispula*, and *Q. serrata* were rated as poor, medium, and light, respectively. Comparing the acorn crop yields in the mass intrusion years (2006, 2011, 2014), the yields of *Q. crispula* were higher, whereas those of *F. crenata* were poor in both years. Thus, the amount of food resources in mountain areas at high elevations was greater than that in the mass intrusion years and might be sufficient for bears. This would explain why mass intrusion of bears did not occur in the autumn of 2016.

**Key words:** masting, *Fagus crenata*, *Quercus crispula*, *Quercus serrata*, *Ursus thibetanus*

### はじめに

クマ類の人里付近への出没件数には大きな年次変動があり、ときに大量出没が発生することが知られている。たとえば、ツキノワグマ *Ursus thibetanus japonicus* (以下、クマ)の人里付近への出没頻度の指標となる有害捕獲頭数は、平年(1970年~2001年平均)では全国で1,150頭程度であるが、2004年、2006年には、それぞれ2,241頭、4,846頭が捕獲される大量出没に至った(環境省自然環境局野生生物課2007)。

クマ大量出没には様々な要因が関与していることが指摘されているが(自然環境研究センター2005)、なかでも特に関係が深い要因は、山地における秋季の利用可能な餌資源の不足と、里山林の管理放棄などに伴う里山域の環境変化であると考えられる(e.g. 米田2007)。とりわけ秋期の餌不足は、クマ大量出没の直接の引き金になると考えられる。

デンプンや脂質に富んだブナ科樹木の堅果類は、冬眠をひかえた秋期のクマの重要な餌資源であるが(橋本・高槻1997)、その結実量には林分レベルで大きな年変動があることが知られている(e.g. Yasaka et al.

2003; 正木・柴田2005; 橋詰1987)。これまで堅果類が結実不良の年の秋期に、クマの行動圏が通常よりも広がったり(米田1990; 水谷ら2007b; 山崎ら2007)、人里に近い低標高地で活動したりする事例(水谷ら2007a)が報告されている。これらは山地で獲得できる餌資源の不足を補うためのクマの順応的な行動の変化と考えられるが、これにともなってクマの人里付近への出没頻度が増加すると推察される。

これまで、ブナ *Fagus crenata* の凶作年、もしくはブナとミズナラ *Quercus crispula* がともに凶作の年に、クマの有害捕獲頭数や出没件数が増加した例が報告されている(谷口・尾崎2003; Oka et al. 2004; 水谷ら2013)。このブナ科樹木の豊凶とクマ出没の関係性から、堅果類の豊凶を事前に把握することにより、その大量出没を早期に予測できると考えられている(Oka et al. 2004)。

そこで、福井県ではクマの大量出没を予測するための基礎資料を得ることを目的として、県内における主要なブナ科樹木4種(ブナ、ミズナラ、コナラ *Q. serrata* およびクリ *Castanea crenata*)を対象に県全体の広域的な豊凶モニタリング調査を2005年から継続的

福井県自然保護センター研究業績 第99号

\* 連絡・別刷請求先 (Corresponding author) E-mail: t-kuninaga-2j@pref.fukui.lg.jp

<sup>1</sup> 福井県自然保護センター 〒912-0131 福井県大野市南六呂師169-11-2

Fukui Nature Conservation Center, Minamirokuroshi 169-11-2, Ono, Fukui 912-0131, Japan.

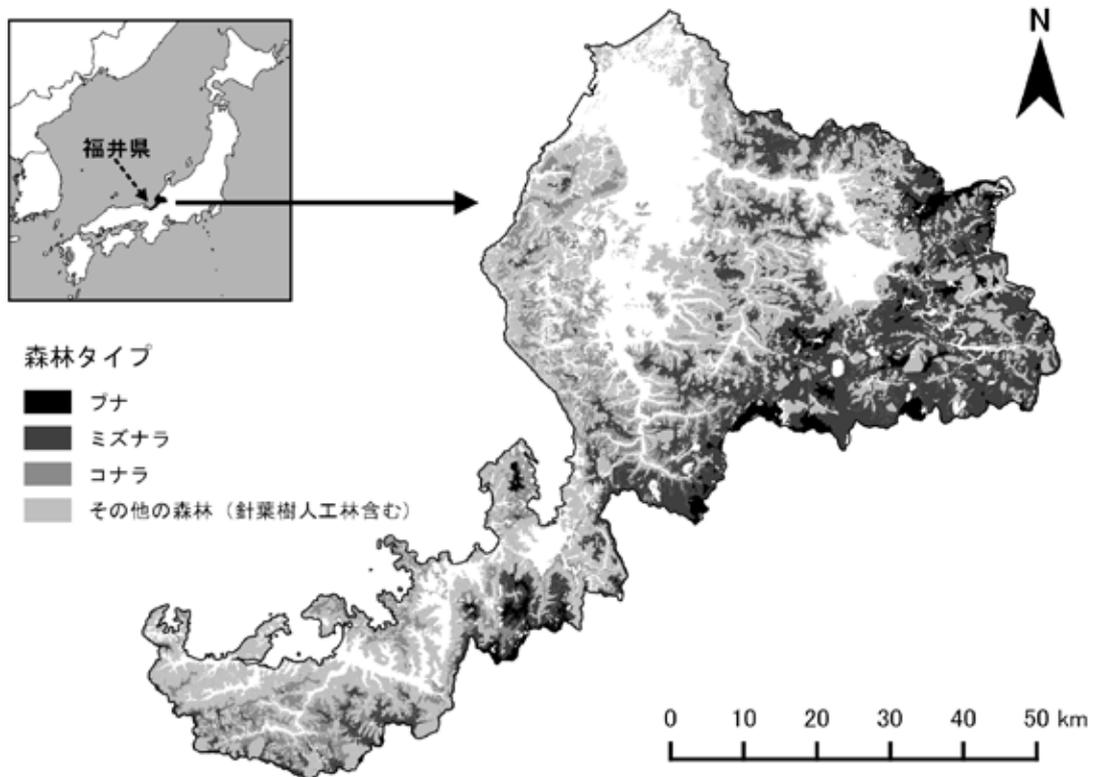


図1 福井県における主要なブナ科樹木が優占する森林の分布。森林タイプは自然環境情報 GIS（環境庁自然保護局 1999）を元に作成した。

に実施してきた（水谷 2016, 水谷・多田 2006, 2007, 2010, 2011b, 2012, 2013, 水谷ら 2008, 2009, 坪内ら 2016, 國永・松村 2017）。本報告では 2015 年の豊凶モニタリング調査の結果について報告するとともに過去の調査における堅果類の着果状況と比較し、堅果類の豊凶とクマ大量出没との関係について検討する。

## 調査地と方法

### 調査地の概要

図1は福井県における主要なブナ科樹木が優占する森林の分布を示したものである。ブナ、ミズナラ、コナラが優占する森林は森林面積全体の約 50% を占め、標高によって優占する樹種が異なる。ブナ林の分布は、おおむね標高 600m 以上の奥山に限られており、全森林面積に占める面積割合は約 5%（143km<sup>2</sup>）と小さい。ミズナラ林は、おおむね標高 400m 以上の山地に分布し、全森林面積に占める面積割合は約 30%（939km<sup>2</sup>）であり、調査対象とするブナ科樹木の中では最も森林面積が広い。特に嶺北（県北部）の山間部にまとまっ

て分布している。コナラ林は、おおむね標高 400m 以下の地域に分布し、全森林面積に占める割合は 17%（520km<sup>2</sup>）である。コナラ林がまとまって分布する地域は、嶺北の山麓部や嶺南（県南部）地方に多い。

調査は、ブナ、ミズナラおよびコナラを対象樹種とし、それぞれ 10 地点、14 地点および 15 地点を選定した（図2）。調査地の選定の際には、ブナ科樹木が優占する森林面積が 50% 以上を占める 2 次メッシュにおいて、主要な樹種ごとに調査地点を 1 地点ずつ選定した。このほか、過去にクマが出没した山麓部や公園地域などには、市町との連携による調査地点を設定した。市町との連携による調査は、クマ出没に関する注意喚起を実施するための具体的な資料を得ることを目的にしたもので、不特定多数の人が利用する公園キャンプ場などで、調査対象木が 10 本以上連続して選出できる調査地点を、市町担当者と協議して選定した。

### 調査方法

調査は 2016 年 8 月 9 日から 8 月 27 日までの期間に実施した。

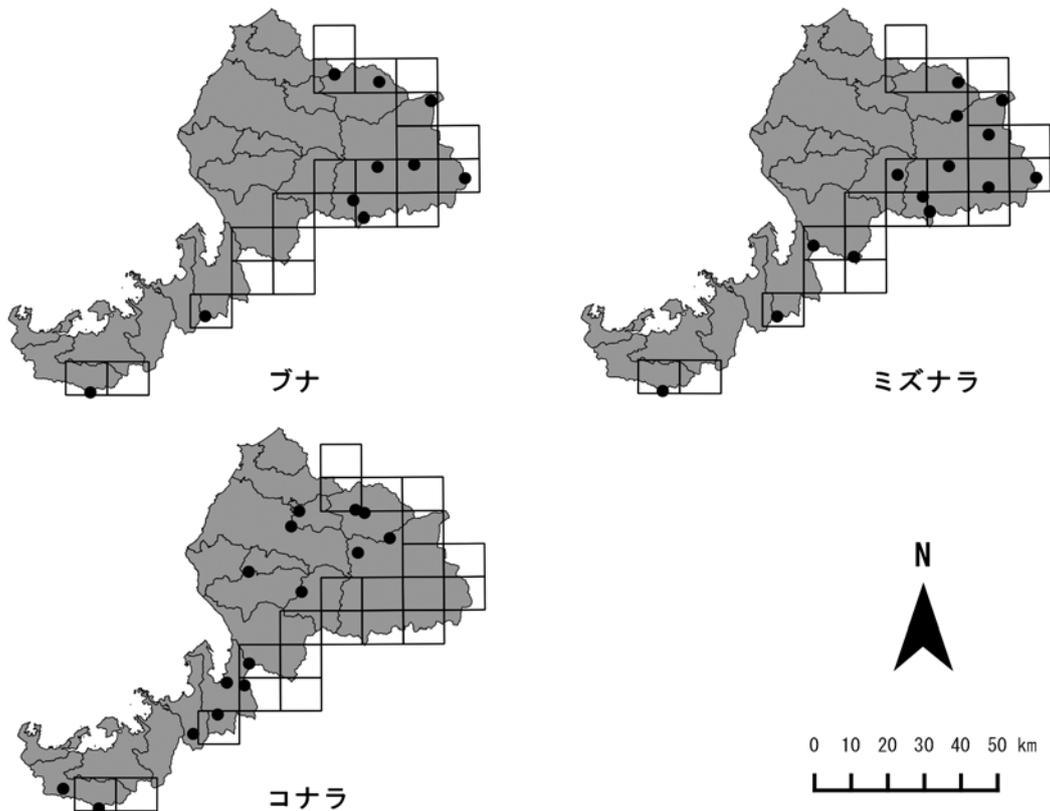


図2 調査地点の位置。メッシュはブナ科樹木が優占する森林の面積が50%以上を占める二次メッシュ。

調査地点ごとに胸高直径が20 cm以上で、樹冠が林冠層に達し、極度に被圧されていない個体を調査木として20本選定した。また、可能な限り林縁木と林内木が半数ずつになるように選定した。

ブナは豊凶間の着果量の差が大きく、その違いが明瞭であるため、樹冠全体を概観しての豊凶評価が可能である。そこで紙谷(1986)を参考に、調査木ごとに、双眼鏡を用いて未成熟～成熟堅果を観察し、定性的な着果の状態から表1の基準でブナ着果度指標を判定した。

一方、ミズナラとコナラは、ブナと比較して豊凶間の着果量の差が小さく、その違いは明瞭ではない。このため水谷(2013)の方法を用い、定性的な着果の状態から着果状況の豊凶評価(簡易評価)を行った。

簡易調査では、調査木ごとに、双眼鏡を用いて樹上の未成熟～成熟堅果の数を観察し、定性的な着果の状態から、表2の基準により個体ごとにナラ類着果度指標を評価した。評価の個人差を避けるため、着果度4と3の判断の際は、ミズナラの場合は「5割以上の枝先に、平均3個以上着果している」、コナラの場合は「6

表1 ブナの着果度指標の判定基準。

着果度指標	着果の状態	着果区分
4	樹冠全体に密に着果	密に着果
3	樹冠全体に疎に着果	
2	樹冠の一部に密に着果	疎に着果
1	樹冠の一部に疎に着果	
0	着果なし	着果なし

割以上の枝先に、平均4個以上着果している」とする定量的基準を設け、慎重に判断した。また、着果度1と0との判断については、「30秒ずつ3回観察しても着果が見当たらない」とする、調査努力量に基づく目安を設定した。さらに、見落としによる過小評価を防ぐため、調査は3人以上で同時に行い、その評価の最大値を評価値として採用した。

#### 地点レベルの豊凶評価

地点レベルの豊凶評価は、3段階の着果区分別個体数割合にもとづいて評価した。

表2 簡易調査におけるナラ類の着果度指標の判定基準。

着果度指標	着果の状態	評価基準	着果区分
5	樹冠全体に非常に密に着果	ほぼすべての枝に、非常に密に着果。 着果している枝は、樹冠表面の半分以上。 着果数が多い枝が目立つ。	密に着果
4	樹冠全体に密に着果	・ミズナラ：5割以上の枝先に、平均3個以上着果。 ・コナラ：6割以上の枝先に、平均4個以上着果。	
3	樹冠全体に疎に着果	着果している枝は、樹冠表面の半分以上。 枝の着果数は大部分が少ない。	疎に着果
2	樹冠の一部に密に着果	着果している枝は、樹冠表面の半分以下。 着果数が多い枝が目立つ。	
1	樹冠の一部に疎に着果	着果している枝は、樹冠表面の半分以下。 枝の着果数は少ない。	
0	着果なし	着果なし。 30秒ずつ3回探しても実が見つからない。	着果なし

個体ごとの着果度指標を3段階の着果区分（表1, 3）に再分類し、着果区分ごとの個体数を求めた。調査地点ごと、および県全体の作柄は、McDonald (1992) の基準に準じて、表4の豊凶評価基準にもとづいて判定した。

#### 統計解析

県全体の年次間での着果状況を比較するため、着果区分別個体数割合に対して Fisher's Exact Test for Count Data で検定を行ったうえで Holm-Bonferroni の方法により多重比較を行った。以上の解析には、R ver.3.3.2 (R Development Core Team 2016) を使用した。

## 結果

#### 県全体の着果状況

図3は、ブナ科樹木3種の県全体の着果状況を示したものである。2016年の福井県における着果区分別個体数割合は樹種間で有意に異なっていた ( $\chi^2 = 549.0$ ,  $df = 4$ ,  $P < 0.0001$ )。多重比較では、すべての樹種の組み合わせにおいて有意差が検出された ( $P < 0.0001$ )。

表3 地点（県域）レベルの豊区評価基準。

作柄 <sup>†</sup>	評価基準
豊作	密に着果の個体が50%以上
並作	密に着果の個体が25~50%
不作	疎に着果以上の個体が25%以上
凶作	疎に着果以上の個体が25%未満

<sup>†</sup> 上位の作柄から順に判定する。

ブナでは殻斗の着生が認められた個体の割合は全調査木の8%であり、密に着果した1個体を除きほかの15個体は疎に着果した個体であった（図3）。

2005年から2015年までのブナの着果区分別個体数割合は、年次間で有意に異なっていた ( $\chi^2 = 2032.7$ ,  $df = 22$ ,  $P < 0.0001$ )。ブナは広域的に同調して隔年結果する傾向があり、2016年の着果区分別個体数割合は2006年、2008年、2010年、2012年、2014年と同程度の結実不良であった。

ミズナラは大部分の調査木で堅果の着果が見られ、密に着果した個体の割合は全体の28.9%であり、2011年、2012年と同程度の割合であった（図3）。2005年から2015年までのミズナラの着果区分別個体数割合は、年次間で有意に異なっていた ( $\chi^2 = 798.0$ ,  $df = 22$ ,  $P < 0.0001$ )。

コナラでもミズナラと同様に大部分の調査木で堅果の着果が見られ、密に着果した個体が占める割合は全体の12.7%であった。コナラの着果区分別個体数割合は、年次間で有意に異なっていた ( $\chi^2 = 272.5$ ,  $df = 22$ ,  $P < 0.0001$ )。

#### 地点ごとの着果状況

図4は、地点ごとの着果状況を示したものである。ブナはすべての地点で凶作であった。ミズナラは14地点のうち3地点が豊作、6地点が並作、5地点が不作であった。豊作の3地点はすべて大野市内の調査地点であった。コナラは15地点のうち1地点が豊作、2地点が並作、12地点が不作であった。

図5は、地点ごとの着果状況の年次変化を示したも

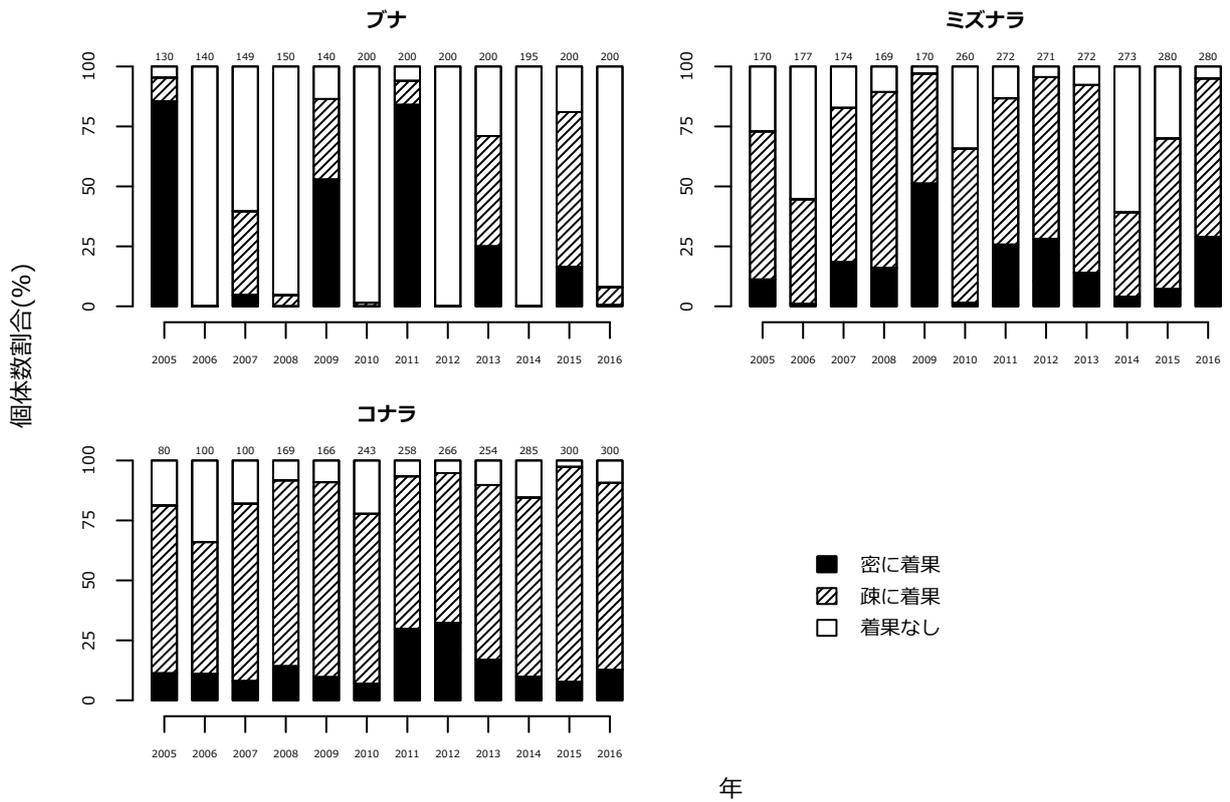


図3 2005年から2015年におけるブナ科樹木3種の着果区分別個体数割合。棒グラフ上の数字はサンプル数を表す。

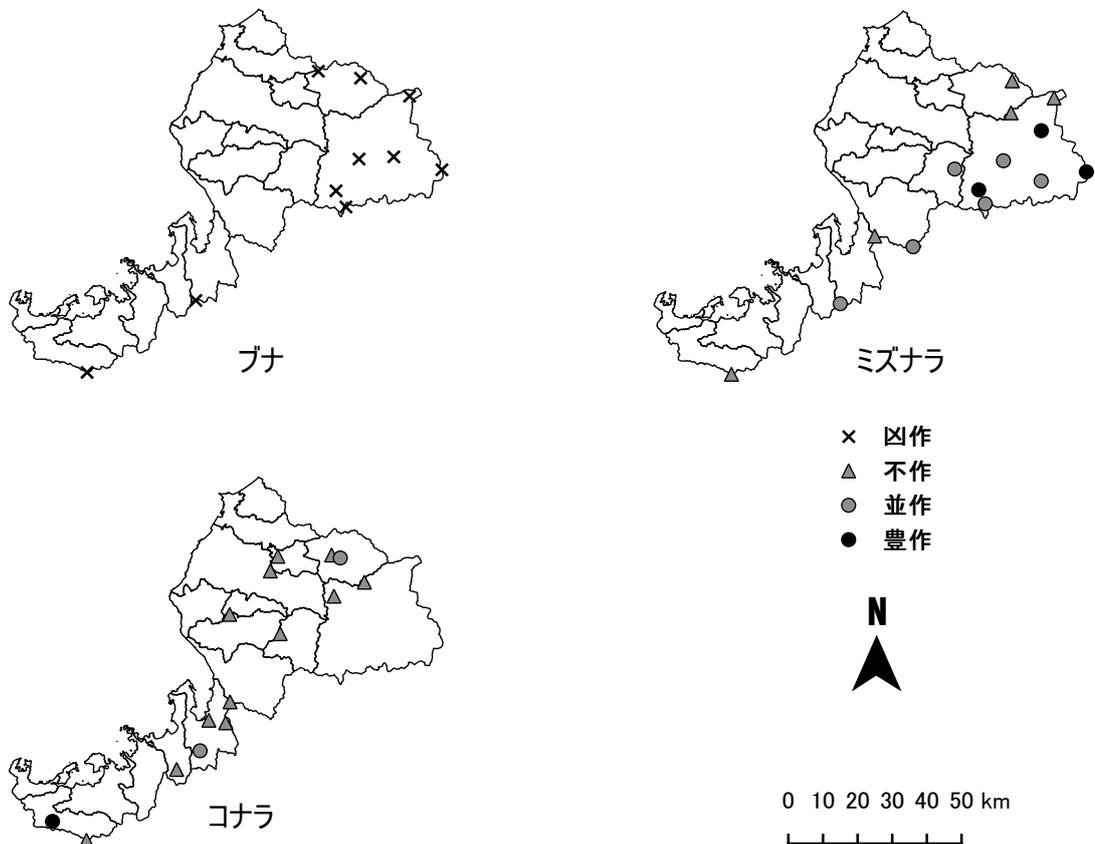


図4 ブナ科樹木3種の地点ごとの作柄。

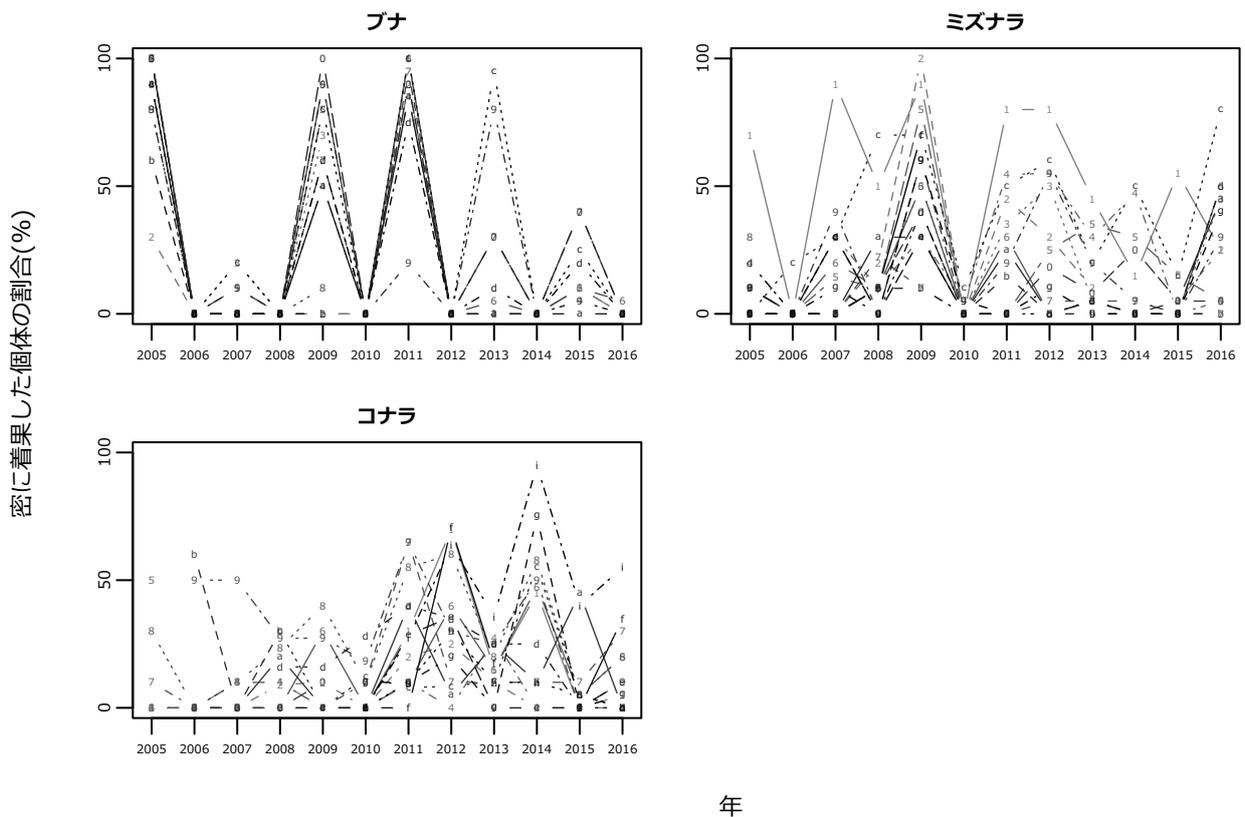


図5 各調査地点で密に着果した個体が占める割合の年次変化。異なる記号は、異なる地点の結果を表す。2年間以上継続して調査した地点の結果は線でつないで示した。

のである。ブナの密に着果した個体の割合はすべての地点で低下し、1地点を除くすべての地点で0%となった。ミズナラとコナラの密に着果した個体の割合は、いずれも9地点で増加し、減少した地点は少なかった。

図6は、年次ごとの各樹種の着果状況と標高の関係を示したものである。2016年は標高500m以上の山地では、ブナの結実は不良であったものの、ミズナラは密に着果した個体が多く認められ、高標高ほどその割合が増加する傾向が認められた。また低標高域を中心に分布するコナラにもある程度の結実が認められた。2016年は県全域でクマの大量出没が発生した2006年、2010年に比べ、すべての標高帯で結実は良好であった。

#### 堅果類の豊凶とクマ出没との関係

図7は、ブナ科3種の結実状況の年次変動と秋期のクマ有害捕獲頭数を示したものである。ブナでは2006年、2008年、2010年、2012年、2014年、2016年に、ミズナラでは2006年、2010年、2014年にそれぞれ極

端な結実不良が確認された。一方、コナラは密に着果した個体の割合は10%から30%の間で推移しており、ブナやミズナラのような極端な結実量の変動はなかった。秋期のクマの有害捕獲頭数には大きな年次変動があり、2006年、2010年および2014年は捕獲頭数が100頭を超す大量出没年になった。クマ大量出没年はブナとミズナラが揃って結実不良となった年と一致していた。

#### 考察

2016年は、高標高域に分布するブナは凶作であったものの、ミズナラの作柄は良好であった。北陸地方で共通してクマの大量出没が発生した2006年、2010年はブナ、ミズナラの作柄がそろって顕著に不良であった年と一致しており、これら2種がクマ大量出没の鍵植物である可能性が示唆されている(水谷2013)。2016年は、ミズナラに結実がみられる点で過去の大量出没年とは異なっていた。

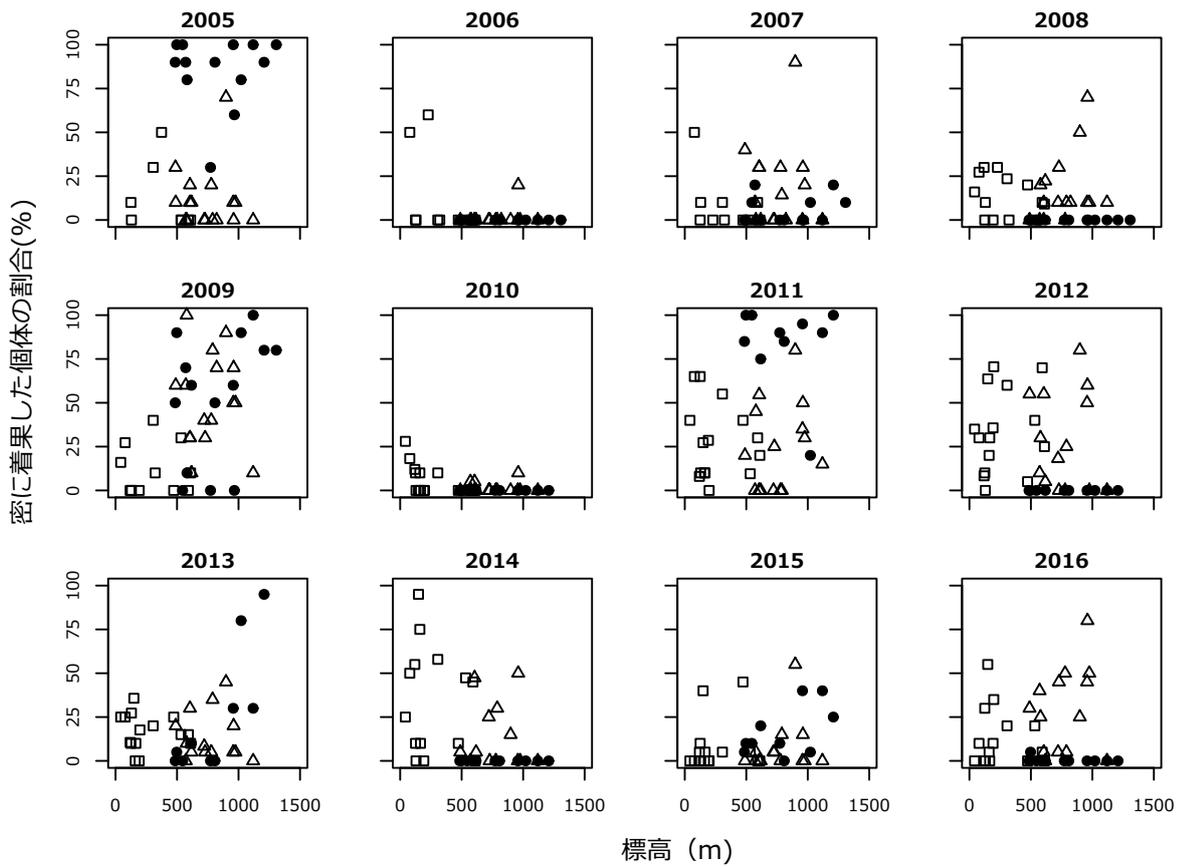


図6 各調査地点で密に着果した個体が占める割合と標高の関係。

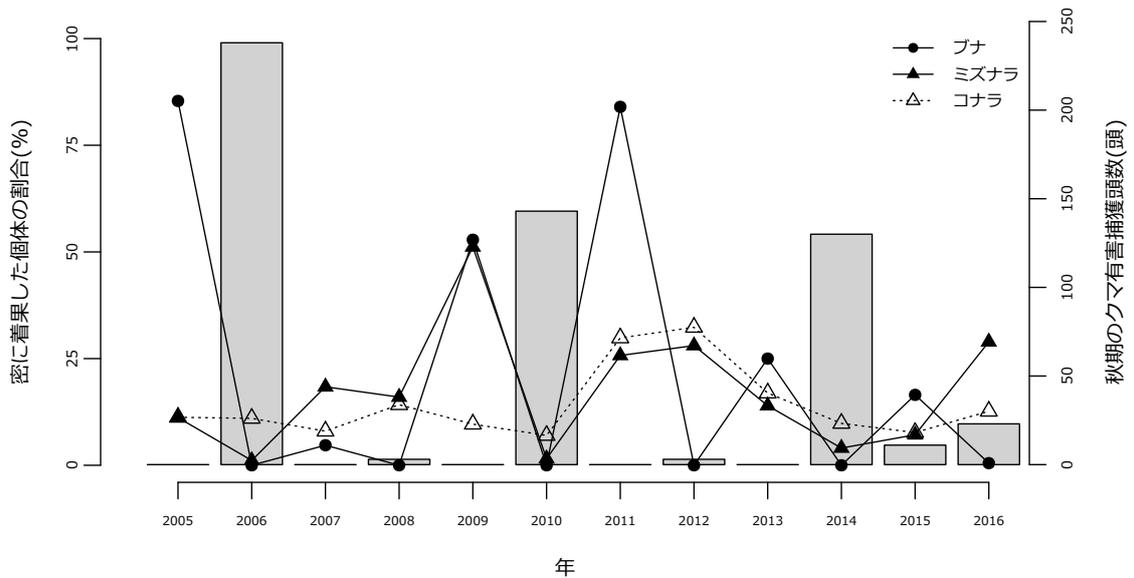


図7 ブナ科樹木の豊凶（折れ線グラフ）と秋期のクマ有害捕獲頭数（棒グラフ）の年次変化。ブナ科樹木の豊凶は、県全体の調査個体に密に着果した個体が占める割合で示した。秋期のクマ有害捕獲頭数は9月から12月までの値。

2016年と同様に、これまでブナが凶作であったもののミズナラに結実が認められていた2008年と2012年はクマの大量出沒に至らなかった。これら2年と比較すると、2016年のミズナラの作柄は2008年よりも良好であり、2012年と同程度であった。

これらの情報を総合的に判断し、福井県は、2016年9月15日に開催された「平成28年度ツキノワグマ出沒対策連絡会」において、クマ大量出沒の危険性は低いものの、局所的には出沒数が増加する恐れがあるため注意が必要との注意喚起を行った。

2016年の秋期(9月から12月)のクマの有害捕獲頭数は23頭であり大量出沒には至らなかった(福井県安全環境部自然環境課2016)。したがって、豊凶モニタリング調査によって把握された堅果類の作柄を根拠とした2016年の福井県におけるクマ大量出沒の発生予測は的中したといえる。

しかしながら、2016年秋期の有害捕獲頭数は、大量出沒に至らなかった平常年の中では2005年以降最多の23頭であり、2015年に続き2年連続で過去の平常年の水準を大きく上回った。近年、県内ではクマの恒常的な分布域の拡大が報告されており、年間を通して出沒頭数が増える傾向にある(後藤2014;福井県安全環境部自然環境課2016)。今後も堅果の作柄が良好な年においても里山や山裾の集落ではクマの出沒が増加する可能性があり、堅果類の豊凶とクマ出沒との関係を注視していく必要がある。

## 謝辞

自然保護センター職員の丸山勝治主任、特定雇用およびインターンシップの学生の皆様には現地調査をお手伝いいただきました。また、市町連携調査には各市町の鳥獣行政担当者、施設管理担当者の皆様にご参加いただきました。ここに記して感謝します。

## 引用文献

福井県安全環境部自然環境課. 2017. クマの出沒状況について(H24年度~H29年度). [http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/shizen/tixyouzixyuu/tukinowaguma2\\_d/fil/220.pdf](http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/shizen/tixyouzixyuu/tukinowaguma2_d/fil/220.pdf) (参照:2017/12/25).

後藤優介. 2014. 北陸地域でのクマの分布動向. 日本クマネットワーク(編)「ツキノワグマおよびヒ

グマの分布域拡縮の現況把握と軋轢抑止および危機個体群回復のための支援事業」報告書. 日本クマネットワーク, 茨城. pp.40-49.

橋本幸彦・高槻成規. 1997. ツキノワグマの食性:総説. 哺乳類科学 37:1-19.

橋詰隼人. 1987. コナラ二次林における種子生産. 広葉樹研究 4: 19-27.

紙谷智彦. 1986. 豪雪地帯におけるブナ二次林の再生過程に関する研究Ⅱ:平均胸高直径の異なるブナ二次林6林分における種子生産. 日本林学会誌 68: 447-453.

環境省自然環境局野生生物課. 2007. クマ類の捕獲数及びクマ類による人身被害について(平成19年1月末現在). 平成19年2月19日付け報道発表資料.

國永知裕・松村俊幸. 2017. 2015年の福井県におけるブナ科樹木3種の着果状況. Ciconia(福井県自然保護センター研究報告)20: 21-31.

Maeto, K., Ozaki, K. 2003. Prolonged diapause of specialist seed-feeders makes predator satiation unstable in masting of *Quercus crispula*. *Oecologia* 137: 392-398.

正木隆・柴田銃江. 2005. 森林の広域・長期的な試験地から得られる成果と生き残りのための条件. 日本生態学会誌 55: 359-369.

米田一彦. 1990. 秋田県太平山地域におけるツキノワグマの生態・テレメトリー調査. 環境庁自然保護局(編)人間活動との共存を目指した野生鳥獣の保護管理に関する研究. 環境庁, 東京. pp.159-206.

McDonald, P.M. 1992. Estimating seed crops of conifer and hardwood species. *Canadian Journal of Forest Research* 22: 832-838.

水井憲雄. 1991. 種子重-種子数関係を用いた落葉広葉樹の種子の結実豊凶区分. 日本林学会誌 73: 258-263.

水谷瑞希. 2013. 目視によるコナラの簡便な豊凶評価. 日本森林学会誌 95: 60-66.

水谷瑞希. 2014. 2013年の福井県におけるマイマイガの大発生とミズナラ堅果生産への影響について. 中部森林研究 62: 63-66.

水谷瑞希. 2016. 2013年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. Ciconia(福井県自然保護センター研究報告)19: 19-29.

水谷瑞希・平山亜希子・西垣正男・多田雅充. 2008.

- 2007年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 13: 33-44.
- 水谷瑞希・平山亜希子・西垣正男・多田雅充. 2009. 2008年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 14: 35-48.
- 水谷瑞希・中島春樹・小谷二郎・野上達也・多田雅充. 2013. 北陸地域におけるブナ科樹木の豊凶とクマ大量出没との関係. *日本森林学会誌* 95: 76-82.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2006. 2005年の福井県におけるブナ科樹木4種の結実状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 11: 64-73.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2007. 2006年の福井県におけるブナ科樹木4種の結実状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 12: 43-52.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2010. 2009年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 15: 43-55.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2011a. ナラ類の目視による豊凶評価手法の比較. *中部森林研究* 59: 245-248.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2011b. 2010年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 16: 33-44.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2012. 2011年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 17: 25-35.
- 水谷瑞希・多田雅充. 2013. 2012年の福井県におけるブナ科樹木4種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 18: 25-35.
- 水谷瑞希・多田雅充・高畑麻衣子・高柳敦. 2007a. 福井県におけるツキノワグマの行動調査Ⅰ: 行動経過と集落等への接近事例. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 12: 53-96.
- 水谷瑞希・多田雅充・高畑麻衣子・高柳敦. 2007b. 福井県におけるツキノワグマの行動調査Ⅱ: 行動圏と環境選択性. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 12: 97-120.
- Oka, T., Miura, S., Masaki, T., Suzuki, W., Osumi, K., Saitoh, S. 2004. Relationship between changes in beechnut production and asiatic black bears in northern Japan. *Journal of Wildlife Management* 68: 979-986.
- R Development Core Team, 2016. R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, ISBN 3-900051-07-0, URL <http://www.R-project.org>.
- 自然環境研究センター. 2005. ツキノワグマの大量出没に関する調査報告書(平成16年度ツキノワグマ個体群動態等調査事業). 自然環境研究センター, 東京.
- 谷口真吾・尾崎真也. 2003. 兵庫県氷ノ山山系におけるブナ・ミズナラの結実とツキノワグマの目撃頭数の関係. *森林立地* 45: 1-6.
- 寺澤和彦. 2002. 北海道全域における1991-1999年のミズナラ堅果の豊凶(I): 個体ごとの結実特性. *北方林業* 54: 73-76.
- 坪内和夫・國永知裕・多田雅充. 2016. 2014年の福井県におけるブナ科樹木3種の着果状況. *Ciconia* (福井県自然保護センター研究報告) 19: 31-41.
- 山崎晃司・小池伸介・小坂井千夏. 2007. ツキノワグマの土地利用と出没. 坪田敏男(編) JBN 緊急クマシンポジウム&ワークショップ報告書. 日本クマネットワーク, 岐阜. pp. 52-53.
- Yasaka, M., Terazawa, K., Koyama, H., Kon, H. 2003. Masting behavior of *Fagus crenata* in northern Japan: spatial synchrony and predispersal seed predation. *Forest Ecology and Management* 184: 277-284.
- 米田政明. 2007. ツキノワグマ保護管理の課題: 教訓を生かす. 坪田敏男(編) JBN 緊急クマシンポジウム&ワークショップ報告書. 日本クマネットワーク, 岐阜. pp. 8-15.

付表1 調査地点ごとの着果区分別本数と豊凶判定.

樹種	調査地(市町)	2次メッシュ コード <sup>†</sup>	標高(m)	調査日	着果なし	疎に着果	密に着果	合計	豊凶判定
ブナ	北谷町谷(勝山市)	543614	545	8/25	19	1	0	20	凶作
	竹田川上流(坂井市)	543613	772	8/9	20	0	0	20	凶作
	川合(大野市)	533665	485	8/23	18	2	0	20	凶作
	黒河林道(敦賀市)	533620	497	8/17	17	2	1	20	凶作
	モッカ平(大野市)	533664	957	8/24	20	0	0	20	凶作
	温見峠(大野市)	533654	1021	8/24	16	4	0	20	凶作
	刈込池(大野市)	543605	1119	8/20	20	0	0	20	凶作
	油坂峠(大野市)	533666	808	8/23	17	3	0	20	凶作
	平家平(大野市)	533653	1208	8/27	20	0	0	20	凶作
	五波峠(おおい町)	533505	617	8/18	17	3	0	20	凶作
			合計		184	15	1	200	凶作
ミズナラ	部子山(池田町)	533663	898	8/19	1	14	5	20	並作
	黒河林道(敦賀市)	533620	578	8/17	0	15	5	20	並作
	モッカ平(大野市)	533664	957	8/24	4	7	9	20	並作
	山中林道(南越前町)	533641	605	8/20	1	18	1	20	不作
	南六呂師(大野市)	543604	789	8/25	1	18	1	20	不作
	平家平(大野市)	533653	975	8/27	0	10	10	20	豊作
	五波峠(おおい町)	533505	617	8/18	3	17	0	20	不作
	夜叉ヶ池(南越前町)	533642	489	8/21	0	14	6	20	並作
	北谷町谷(勝山市)	543614	721	8/25	1	18	1	20	不作
	温見(大野市)	533654	728	8/24	1	10	9	20	並作
	刈込池(大野市)	543605	1119	8/20	2	18	0	20	不作
	池ヶ原(大野市)	533675	960	8/26	0	4	16	20	豊作
	油坂峠(大野市)	533666	778	8/23	0	10	10	20	豊作
	伊勢(大野市)	533665	571	8/23	0	12	8	20	並作
				合計		14	185	81	280
コナラ	山中林道(南越前町)	533641	592	8/21	1	18	1	20	不作
	五波峠(おおい町)	533505	610	8/18	1	19	0	20	不作
	荒土町別所(勝山市)	543613	129	8/9	7	13	0	20	不作
	南六呂師(大野市)	543604	532	8/27	0	16	4	20	不作
	黒河林道(敦賀市)	533620	125	8/17	0	14	6	20	並作
	池河内(敦賀市)	533631	306	8/16	0	16	4	20	不作
	東山公園(福井市)	543602	78	8/9	0	18	2	20	不作
	八ツ杉キャンプ場(越前市)	533662	473	8/19	6	14	0	20	不作
	松岡公園(永平寺町)	543612	119	8/10	1	19	0	20	不作
	鯖江青年の家(鯖江市)	533671	42	8/19	2	18	0	20	不作
	亀山公園(大野市)	533673	192	8/9	1	17	2	20	不作
	長尾山総合公園(勝山市)	543604	198	8/9	1	12	7	20	並作
	金ヶ崎公園(敦賀市)	533630	160	8/16	2	17	1	20	不作
	新庄(美浜町)	533527	165	8/16	6	14	0	20	不作
	流星館キャンプ場(おおい町)	533504	149	8/18	0	9	11	20	豊作
			合計		28	234	38	300	不作

† 市町との連携による調査地点.

‡ 日本測地系に準拠した2次メッシュコード(約10 km × 10 km; 行政管理庁1973).